

---

# 秘密の花園

戸理 葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秘密の花園

### 【Nコード】

N6077U

### 【作者名】

戸理 葵

### 【あらすじ】

「サイ」シリーズの番外編、ある老人の、愛と切なさに満ちた、思い出話です。彼は妻をとても愛していましたが、新婚で戦争に徴兵されてしまいます。妻は草花を愛し、病人や怪我人を治癒するという不思議な力を持っていました。そして戦地で彼が体験した出来事と、終戦後に彼が出会う不思議な体験とは？

ああ、いい天気ですね。爽やかで、随分と秋らしくなってきました。気持ちがいい。あなたも、どなたかの面会に来られたのですか？  
そうですか。それはいい。いいですね。本当にいい。ええ、ここは本当にいい所ですよ。まるで皆の我が家の様だ。はたして、本当の我が家との区別がついている人間が、どれほどいるのか分かりませんけどね。あはは。職員は皆、素晴らしいですよ。大変なお仕事です、ありがたい事です。

私？ 私ですか。私には面会人など来ませんわ。いえいえ、家族がない訳ではありません。ちゃんとおります。頑張つてね、みんな生きておりますよ。本当にありがたい事です。家族がいる、孫がいると思うだけで、この世界が、生きる価値のある世界のように感じられますからね。不思議です。同じ空気を吸って、同じお天道様てんとうさまの下に孫達がいる、と思うだけで、目に力が入りますからね。わかりますか？ 目に、力が入るんです。これが年寄りには重要なんですわ。若い人には、わからないでしょうなあ。目に力が入ると、ものを見ようとするのですわ。これ、孫がおらんかったら、地球温暖化とか環境問題も、そんなに真剣にはニュースを聞かんでしょうからねえ。はっはっは。

最近地球も人間も、物騒な世の中になりましたね。政治家も、コずるいモヤシみたいなのばかりで。ああ、いかん、年寄りには偉そうに文句が多い。けど昔は、お天道様てんとうさまが見とる、お天道様の下で恥ずかしくない事を、言うつたのですがねえ。今は誰も、それを言いませんね。正直者は馬鹿を見て、お天道様は見とるんです。だから、いつでも正しい事を、胸を張って出来るんです。そんなお天道様がおらんくなつたから、世の中はみつともない事をする人が

増えたのですかね。ああいかん、また文句を言つとる。

それでも、私は過去の遺物です。

家族の、お荷物になりたくないんです。だからここに来たのです。だから子供達が他界した時に、もう、付き合いは絶ちました。あの子らには未来を見て欲しい。私も、家族の事には口を出したくない。信じられますか？ 私、子供らよりも長生きしとるんです。

ところであなたは、大変失礼ですが、お気を悪くなさらないで下さい、私の家内に似ておりまして。その、雰囲気が。

家内がね、それはそれは綺麗な女だったんです。もう、私には勿体無いくらいの美人で。それはもう、ぞっこん、惚れておりました。どこか西洋の血が混じつとるような、みすてりあすな、ゆうんですか？ 綺麗な瞳をしておりますね。不思議な事に、家族の中ではあれだけが、そういう顔をしておりました。性格がまた、優しく穏やかで。ええ、ええ。本当に、私には勿体の無い女房でした。気立てのよい、いい女房でした。本人はずっと、苦勞をして来たのだから。他人の事を常に思いやり、心を砕く女でした。

あなたのお顔を見ていたら、家内の事をどんどんと思いだして来ましたよ。

お話しても、よろしいですか？ 年寄りの話を、聞いてもらえますか？

そうですね。それは嬉しいですわあ。

本当に嬉しい。女房の話を人にするのは……この話を人にするの

は、

多分、初めてではないかなあ。

女房は、草木を育てるのが趣味でした。近所の誰よりも、育てるのが上手かった。あれの手にかければ、どんな植物も綺麗な花を咲かせ、葉を茂らせ、実をつけたのです。植物の世話をしている時の家内の表情が、一番、幸せそうだった。本当は、農家の嫁になるべき女だったのかもしれない。私が強引に、貰い受けなければ、ね。

私は職業軍人ではありませんが、二度程徴兵を受けました。武道をやっていて、これが中々のものなんです。時代がよければオリンピックに行く行けたと思っています。あの時代は、オリンピックの競技科目ではなかったのです。とにかく、体格が良いし成績が良いので、二度も徴兵を受けたと思います。最初の徴兵前に家内と結婚し、私はすぐに戦地へ行きました。帰って来てから長男が生まれ、それから三年後、また戦地へ行きました。太平洋戦争です。

幼い息子と離れる時、自分は息子の記憶に残る父親でいられるのか、やはり不安でした。しかも家内のお腹にはもう一つの命が宿っていた。二つの小さな命と、年老いた私の両親の命を、あの細腕で守らなくてはいけないのです。あの頃は既に、食糧難が始まってい

た。私は、残していく家族のこれからの事を考えると、胸が塞がる  
思いでした。

でもあの頃は、みんながそうだったのです。みんな、抛り所が無  
く、自分の運と力だけを頼りに、国を愛して、友人を愛して、家族  
を愛して、他人の事も愛していました。

それでもね、誰もが不安で暗い時代の中、家内はそれはそれは美  
しかった。

誰よりも美しくて、気高く、優雅で、慈悲に溢れていた。

服だつて、みずばらしいものを着ている。私の母がケチだつたか  
らね。買う事が許されなかった。嫁に来てから、朝から晩まで、身  
重の体で、それはよく働いていた。庭での畑づくり、炊事、家事、  
洗濯、何でもやった。文句ひとつ、言わなかった。けれども母は、  
そんな女房を褒めるどころか、当り前だと胡坐あぐらをかいて、近所の連  
中に嫁の文句を言いふらす程だつた。

何故かと言うとですね。

世間を騙ます卑いやしいエセ祈祷屋まじうを、わざわざ嫁に貰もらって、免罪して  
やったのだから。

世間に顔向け出来る体裁を、我が家が取ってやったのだから。常  
識人の仲間入りをさせてやっているのだから。

と言うのです。これ、どういふ事が分かりますか？

実は家内には、不思議な力があつたんです。人を癒す力です。

心を、じゃないですよ。

体を、です。

病気を、治すんです。

まじないで。

その場で。

ただ、誰の事でも治せる、と言う訳ではない。

彼女のまじないの効果は、大別すると、三つに分かれていました。良くなる人と、変わらない人。

そして、死んでしまう人。

死んでしまう人はそもそもが、家内の所に来た時点でほとんど、生ける屍状態なのですがね。まあ、彼女とまじない部屋に入り、出てきた時には死んでいる、という事もしばしばありました。加えて家内は、まじない部屋には自分と患者以外誰も入れません。中で何が行われているのか、患者本人にも記憶がありません。これが、彼女を益々、周囲から孤立させていました。

あの女は、時々、人の生気を吸っているのではないかと、と。

私には分かっていました。家内は患者を見ただけで、大体の予想がつくのです。救えるのか救えないのか。連れ添っているうちに、そんな家内の目の色を読み取る事が出来るようになりました。ですからある日、言いました。

「どうしてそこまで、お前がバカを見なくちゃいけないんだ。そも

そも彼らは医者からも見放されて、お前の所に駆けこんでくるのだらう？ そんな奴らにお前は、大した金も要求しない。善意の塊ではないか。助けられなかったと罵倒されて陰口を叩かれて、そんな仕打ちを受ける筋合いがない。命を救ってやった奴らも、時が経てばありがたみが薄れとばつちりを恐れ、なりを潜める。ならば最初から、救える見込みのある奴だけ、引き受ければいいものを」

すると家内は微笑みました。まるで花の様に柔らかく微笑みました。彼女は好んで、野菊の様な、控えめで可愛らしいけど、芯のある花を育てていましたが、その花と同じ微笑みを、私に見せてくれたのです。それは私達夫婦の間で、会話と同じくらい、頻繁に交わされる笑みでした。家内は他人にも優しく笑いますが、私に対しては、溢れ出る愛情が彼女の美しい顔をいつも彩いろどっていました。

「そうですね、あなた。私はあの人達の、最後の頼みの綱ですわ。文字通り、駆け込み寺なのですよ。そんな私が、病人を見る前にその方達を追い返したらどうなるかしら？ 生きると言う事に対して、挑まずに白旗を上げる姿勢を見せたら、私達は今のこの国を生き抜いてはいけないわ。結果では無く、臨み続ける事に意味があるのよ」

真つ直ぐに私を見上げるその姿は、たおやかで凜として美しく、  
いまでも目蓋に焼きついています。

「じゃあせめてお前が頑張っている姿を、患者の家族に見せたらどううかね？ いつも患者と二人きりで籠もっていても、何も分からな  
いだらう。部屋に家族も招き入れれば、お前のその嘘の無い、純粹

で高潔で泥臭いまでに正直な心が、伝わるかもしれない」

「それはできません。人に見せる訳にはいかないんです」

「何故？」

「…手術室に、患者の家族を招き入れる外科医がいますか？ 家族は、冷静な協力者ではありません」

「なら私は？」

すると彼女は、嬉しそうに可笑しそうに、声を上げて笑いました。

「あなたを招き入れる、目的が見当たらないですわ。ご覧になってどうなさりたいの？ それで何か、私達を取り巻くこの状況が変わるかしら？」

私はそんな彼女を、そっと胸の中に抱き寄せました。

そして彼女の花の香りを楽しみながら、ゆっくりと伝えました。

「私はお前の、全てを知りたいんだよ」

「…なら、尚更お見せできません」

そう言って体を離し私を見つめる彼女は、とても満たされた笑顔でした。

「そうすればあなたは、朝も夜も、私の秘密が気になって頭から離れないでしょうから。一日中、私の事ばかり考えてくれますものね」

私はそんな彼女が、愛しくて愛しくて、堪りませんでした。

世間が何と言おうと、母がどう言おうと、私にとって家内は、人生の全てであり、幸せの全てであり、喜びの全てであったのです。彼女のいるこの国を守る為なら、私はどんな戦地へ行ってもいい、と思っていました。

「恩返しをしてしまう様ないじらしい機織りの鶴かと思っていたら、とんだはねっかえりだな。主人の心を上手く、手玉に取っている」「まあまあ。手玉に取るなんて人聞きの悪い。心の底より慕っています」

彼女は茶目っ気たっぷりに答えました。

「それに私は、どんな事があってもあなたから離れたら致しません。あなたは私の全てなのですから。どんな事があってもあなたを支えます。あなたと子供達を、守ってみせます」

そう言う家内は、少女の様な純粋な表情をしていましたが、目は全てを見通している神の様な眼差しでした。

そんな彼女を見ると、私はいつも切なくなるのです。

私は再び、彼女を抱きしめました。

「お前は、か弱い鶴などではないな……。花の神だ。：私だけの」  
「神だなんて、おこがましいです。それになんとか恐いですわ。せめて花の精、ぐらいいにして下さい」

「：花の精：私だけの、愛しい」

本当に、私には勿体の無い女房でした。

## 1 (後書き)

このお話に目を通して下さった方、ありがとうございます。

お気づきの方も多いと思いますが、このお話の世界は、別作品に通じております。

2日に一度の更新を目指しますので、お付き合い頂けると嬉しいです。

この作品が、皆さまのお暇つぶしに役立ちますように。

戸理 葵

この家族を守る為なら、どこへでも行ける。

そう思った私が飛ばされた先は、東南アジアの激戦区でした。

あなた、戦争の話はご存知ですか？

そうですか。それはそうでしょうなあ。あなたみたいにお若い方は、もう身近に、あの戦争を体験された方などおらんでしょう。いても、戦後の教科書に墨を塗った、いうお話でしょうなあ。え？ギブミーチョコレート？ あなたのおじいさんが？ あはは、そうですね、それはいい。いいですねえ。ほお、押し入れの中で？ ああ、兄弟に見つかる腕ずくで奪われますものね。元気ですねえ、可愛らしい。さぞかし美味しかったでしょう。丁度ね、私の子供がそれくらいの歳でした。子供達は皆、腹を空かせていた。

兵隊も、腹を空かせておりました。

例えばです。話がちょっと反れますが、聞いて下さいますか？

戦地で、イギリス軍の集中砲火を何日も浴びましてね。私達は弾豪の中に閉じ込められました。

何日経ったか分かりませんが、ある日私達は気付きました。私達の隊以外、周囲は全滅してしまっているのです。私達の弾豪だけが、運良く、爆弾の投下を免れていました。周囲の弾豪の中は、仲間の死体で埋め尽くされていました。

そこから更に何日も、攻撃が続く訳です。私達は弾が切れ、前進する事も後退する事も出来なくなりました。食料も底をつき、全員が飢えました。もうここで死ぬんだ、と思いました。

もう一度、妻に会いたいと思いました。

情けない事にね、子供よりも妻、だったんですよ。

実際、毎晩毎晩、彼女の夢ばかり見とりましたから。

あの笑顔に包まれない、と願いました。その為なら何でもする、とね。

それに死ぬと思ったら、なんだか悔しくなりましたね。一矢報いてやる気にもなりませんでした。

でもどうせ一矢報いるのなら、捨て鉢にやるのではなく、ほんの僅かでも仲間の未来に繋げたい。

私は上官に申し出ました。

「後退するしかありませんが、弾が無くてはそれも無理です。自分が、敵から弾を奪ってきます」

上官は度肝を抜かれ、どうやって、と聞いてきました。

「自分一人で、行ってきます。夜だとかえって警戒が強まるでしょうから、不意を狙って昼間、昼食時を狙って行きます。弾倉庫を見つけ、奪ってきます」

とても遂行可能な作戦とは、誰もが思えませんでした。しかし皆で考えても、他に手段が思い浮かびません。上官が言いました。

「よし、わかった……しかし俺も行く」

私達二人は、敵の昼食時を待ちました。そして決行すると言う時、上官が私に囁きました。

「いいか。どんな事があっても、弾だけ狙え。他の物には目もくれないな。注意が反れた瞬間、この作戦は終わりだ。皆が死ぬ。わかったな？ 他の物は、見るな」

他の物、とは、食料の事です。

お昼のその時間は、敵の陣地は食事の匂いで満ちていました。それに気を取られるな、と言うのです。頭では分かっていますが、これは本当に苦しい事でした。私達は飢えていたからです。

そして私に言い聞かせている上官の眼も、必死で、飢えていました。その言葉は、彼自身に対する戒めだったと思います。

こうして私達は奇跡的にも無事、弾薬を手に入れる事が出来、皆が一命を取り留めた訳です。

しかしそこから先の敗走も、それはまあ、地獄でした。

そもそも日本が戦争に負けた事、知らなかったのですから。

まず、当り前に食べ物がない。ジャングルのネズミを食べながら、川を腰までつかって進みました。すると腹を下す。皆、垂れ流しです。

疲労と飢えと腹痛で、頭が朦朧とする。すると正気を失う。

隊を組んで進んでいると、遠くの方で叫び声が聞こえる。続いて、爆発音。

すると皆が思つ訳ですよ。「ああ、また一人、仲間が自害したな」辛すぎて、耐えられなくなった者が、手りゅう弾を抱いて自爆するんです。

そんな音を聞きながら、歩みを止める事無く進んで行きました。

その頃になると私は、夜のみならず昼間でも、妻の夢を見るようになりました。

彼女が私の傍らかたわにいる気がして、彼女の息遣かたわいが聞こえる様でした。彼女はいつも微笑んでいました。

ですから私は極力、そういう状態を作ろうと自ら意識を飛ばし、妻を感じていたいと願ったのです。地獄と言つ現実からの、逃避です。一瞬でも夢の中を歩く事が出来て、それは僅かながら、私の苦痛を和らやわげてくれました。

皆、同じ様な状態だったと思います。心に家族を思い浮かべ、愛する人を思い浮かべて、毎日息を吸う。それを出来た人間だけが生き残れたのだと思います。

疲労困憊の日々が続いたある日、仲間の一人が私の目の前で座り込みました。

「もう、俺は歩けない。先に行ってくれ」

「立てよ」

「無理だ。行け」

それを聞いた私は、彼が持っている荷物を指さしました。それは、我々兵隊の命綱とも言つべき道具が僅かながら入っており、決して身から離すな、というのが常識でした。それを手放すと言つ事は、死を意味するのです。

「それを捨てる」

そう言つと、彼は驚愕し、動揺しました。

「何を言ってるんだ。出来る訳無いだろ」

「いいから、捨てる」

「そんな事したら、俺は死んでしまふ！」

「このまま座りこんでいても死ぬだろう。だったら一歩でも前へ進め。荷物を減らすんだ。身軽になれ。それを、捨てる」

呆然とした彼は、散々悩んだ末、その荷物を降ろしました。私はそれを、待ちました。

すると、立てるようになるんです。僅かな荷物ではありましたが、

疲れ切った体には大きな重りだったのです。それぐらい、我々は限界でした。

それでも前に、進みました。

命綱を捨ててでも、前に進む。

その後、同じように座りこむ部下達に、私は同じ指示を出し続けました。彼らを一步でも、前へ歩かせる為です。ゴールの見えない道のりですが、置いて行く訳にも、皆が立ち止まる訳にもいきませんから。

ただ生きる。ただ、その為に。そんな日々が、何カ月も続きました。

そしてある日。

やはり同じ様に、荷物を捨てる様に指示を下した相手に。

私は刺されました。

彼はね、既にパニックになっていたのです。ずっと、見えない敵や見えない声、死んだ仲間の姿や声が聞こえる、追いかけてくる、自分を責めている、と言い続けていた男でした。

荷物を捨てるように言い渡した私が、彼に死刑宣告をした様に見えるたのでしょね。

普通我々兵隊は、戦地で上官から死ぬように命令されれば、それを遂行するような集団です。でも私は、常日頃から、例え一人になっても生き残れ、と彼らに言い聞かせてきた。

まさかそれが、部下に刺される事に繋がるとは思っても見ませんでした。

いや、彼の中では、繋がっていなかったのかもしれない。

私は、死にました。

そう。敵の弾や爆弾をくぐりぬけてきた私が、味方のナイフ一突きで、命を落としたのです。

目の前で、妻の笑顔が鮮やかに蘇りました。

## 2 (後書き)

……暗い！ 暗すぎる！

この小説の主題は、ここでは無いのです。だからこんな暗い部分は  
一気に飛ばします。すみません、もう少しだけお付き合いください。

死んだんです。確かにそうだった。

何をバカな事を、と思われるでしょう。だってこの歳までしぶとく生きているのですからね。この年寄りには自分を正気だと信じている、けどどそう信じているのは本人だけだ。そう思われても仕方ありません。

でも私は確かに死んだ。そう断言できるのには訳がある。順を追って話します。聞いて下さい。

目が覚めたら、私は簡易ベッドに寝かされていた。

ベッドと言っても、木の板に草を引いただけのベッドです。しかも場所は、屋根があるだけのおよそ建物とは言えない家屋の中。私はイギリス軍の捕虜収容所にいました。そこは、その収容所の病室でした。名ばかりの病室です。

周囲は捕虜……つまり日本人の病人で溢れていた。特に赤痢がひどかった。大勢の人間が、ただ、ベッドの上に横たわって、皆呻いているだけだった。

私は、刺された直後に、イギリス軍の捕虜になっていたのです。

よく、三途の川を引き返す夢をみた、とかいいますね。あれ、全然ですわ。私は目を覚ますまでの二日間、全く夢など見ませんでした。皆無です。あれ程毎日見続けた妻の夢さえ、見なかった。同じ隊の連中も、私が微動だにしないのもう死ぬのだからと思うってい

た、といたしましたから、多分本当に、私は何も見とらんかったのだと思います。

ですから自分も、目が覚めた時は、まさか自分が死んでいたとは思いませんでした。かえってね、そういうもんですよ。

状況が飲み込めず、啞然としたのを覚えています。

そしてそこからは、別の意味で、戦いの日々でした。

私もジャングルの中を這いずり回っておりましたから、同じく多分、赤痢にかかっていたのでしょう。大変な腹痛と下痢が、何日も続きました。

ですから、深く刺された筈の傷が何故思ったよりも浅いのか、考える余裕が無かったのです。

それから何故、妻の姿を見なくなってしまったのかも。

戦地にいる時は四六時中感じていた、妻の気配は消えていました。息遣いが消えました。どうやら私に戦いは向いていないらしい、それ程毎日現実逃避をしていたのだな、精神に異常をきたす寸前だったのだろう、と考えました。

収容所では、夢で妻に会える事もたまにありました。しかしそれは、本物の夢、でした。うつろな夢、です。

私は毎日必死な思いで、彼女の幻影を思い浮かべようと思いました。彼女の柔らかな頬、滑らかな肌、花の様な香り、甘い口づけ。

生きて帰る。必ず、生きて帰る。  
それだけが、私の支えとなりました。

果物売りの少年が、毎日のように、収容所の柵の向こうから果物を売りに来ます。これが堪らなく、魅力的な匂いを放っている。甘く、抗いがたい誘惑です。

それを、ふらふらと買いに行く捕虜仲間。その殆んどが、病気を患っている筈でした。そんな連中が、地元の生モノを食べて、ただで済むはずがありません。

「おい、そんなものを食ったら死ぬぞ」

誰かがそう声をかけますが、彼らは聞く耳を持ちません。

「いいんだ。こんなうまいモノ、食って死ぬるなら本望だ」

私は、食べる訳にはいかない。何故なら、必ず生きて帰るからだ。必死でそう決心を固める私の傍らで「うまい、うまい」と彼は、その果物にかぶりついていました。誰も止められない。

そして翌日、そいつは死んでいました。朝、ベッドの上で動かなくなっていました。これは本当に、彼の本望だったのか？ 私は今でも考えてしまいます。



私は息が止まりました。頭が痺れ、心臓も止まったのかもしれない。全身の血の流れが、止まった気がしました。

私と同じように腹にナイフを刺されて、私は生きて、彼女は死んでいる。そんなバカな。

冗談を言われたのかとさえ、思いました。

「……いつ？」

帰ってきた答えは、私の確信を裏付けるものでした。

彼女が刺されて死んだ日は、私が刺された日と、同じだったので  
す。

彼女が私の命を救った。

私は直感しました。

だから私は助かったのだ。だからあの日以来、私は彼女の気配を感じる事が出来なくなったのだ。それまで戦地で、私が彼女の息遣いを感じていたのは、気のせいなんかじゃない。妻が、私の傍らにいつもいたのだ。

不思議なもので、遠く離れていても生きている妻の姿を見る事は出来たのに、死んだ彼女の幻影は、夢の中でしか見れない。しかも私の作りだした姿。私には、死んだ人間を感じとる力は無いらしいのです。

私の胸の中で嬉し泣きをする母と、その後ろで体全体を強張らせて立つ子供達。

彼らを目の前にして、私は、涙を流す事が出来ませんでした。

### 3 (後書き)

ああ、暗かった。

本当は昨日の朝にUPして、一気にカタをつける予定だったのに、システム異常で無理でした。

とにかく、この暗さはコレで終わり……の、予定です。

お付き合いいただいて、ありがとうございます。

それからの日々はあまり記憶がありません。目の前の家族……年老いた両親と幼い子供達を食べさせていく事に必死だったからです。父は庭に畑を作って瓜や芋などを育てていましたが、母は、子供達の世話が大変だ、家事が忙しい、体調が悪い、等と行って、外で働こうとはしませんでした。妻が嫁いできて以来、家の中の事は全て妻が行い、母は楽な暮らしに馴れてしまったのだと思います。時々娘たち……私の姉達の嫁ぎ先まで出向いて、金の無心などをしていました。

そして私は、そんな家族の生活を立て直そうとしました。幸い以前の勤め先は無事に残っておりましたので、そちらに頼み込み、出征前とはかけ離れた地位ではありますが、職を得る事が出来ました。

しかし出征期間が比較的長かった私は、中々社会復帰する事が難しかった。新しい環境に中々馴染めず、戦争の記憶も強く夜もあまり眠れず、職場に居場所を見いだせない為、趣味である武道に没頭するようになりました。家庭の事に目をかけてやれず、子供達の事は両親に任せっぱなしとなりました。

今思えば、妻が消えた心の穴を何かで埋めようと必死だったのだと思います。子供達は二人とも、当り前ですがどことなく妻の面影があり、けれども彼女ではなく、自分勝手な事にそれが辛かった。

特に娘は、初めて見たときにはもう8歳。どう接していいのか、わからなかった。

そんなある日、わたしは病院にいました。

髪が総白髪になった以外、私はこれと言って体調を崩しませんでした。収容所での赤痢が最後です。その日は、視力が弱くなってきたので眼鏡を作ろうと思い、病院を訪れました。

総合病院で受付を済ませた時、私は強烈な匂いを感じました。

強烈な匂いとは、その匂いが強い訳では無く、強烈な記憶を呼び覚ました、という意味です。

あの、花の香りが、漂ってきたのです。妻の、あの香りが。

信じられない思いがして、私は周囲を見回しました。鼓動が激しく胸を打ち、肋骨を突き破るのかという勢いでした。妻がすぐにも、病院の中に姿を現すような気持ちになりました。

急いで周りを捜しました。しかし彼女はいません。それこそ、私には信じられない思いでした。彼女を抱きしめた時に嗅いだ香り、戦地で常に私を包んでいた香り、それが今、漂っているのです。なのに妻がいないなんて、そんな事はない。

私はその漂ってくる香りを、辿る事たどにしました。気付けばそれは、とある病室から香ってきました。

入院病棟の個室の前。もちろん、知らない人の名前。男性です。私は呆然と立ち尽くしました。

迷った末、ノックをしました。返事がありません。

恐る恐る扉を開けてみると、若い、男性が眠っていました。

そして彼の部屋には、先ほどの妻の花の香りが漂っていました。

そして彼自身が、縁取られていました。

ここがね、上手く説明出来んのですわ。人間が縁取られている、というのがどう言う事か、私にもよく分かりません。ピントがぼけてると言うのか、レンズでこう、拡大された様にハッキリと見える、というのか、何か透明な光で覆われている、と言うのか。

つまりですね。彼が独特の何かをまとっていた、と言う事です。言葉には出来ない、何かを、まとっていた。

戸惑った私は、しばらく彼を眺めた後、黙って扉を閉めました。一体何がどうなっているのか、頭では分からなかったからです。

しかし心の中では、直感していた。私は、アレをやらねばならぬ。  
い。

閉めた扉の前で佇たたずんでいると、一人の老女が近づいてきました。彼女は汚い着物を着て、髪も櫛くを入れていない様な、決して身だしなみに気を使っているとは思えない女性でした。同じ年代でも私の母は、身だしなみにとにかく時間と金をかける女性でしたので、

そのあまりの違いに少し度肝を抜かれた程です。

けれども彼女はそんな私の様子にお構いなしに、低い声でいいました。

「あなたは、自分の仕事をやりなさい」

彼女のその厳しい口調と鋭い眼光に、私は後ずさりしました。一瞬、怪しい人物だと罵られているのかと思いました。しかし彼女の様子からして、どうやらそうではないらしい。

この老女は、私がこの部屋の前に立っている、理由を知っている。そう直感しました。

「どつやって?」

そう尋ねると、彼女は眉根を寄せました。

「それは、あんた自身がよく知ってるだろ」

今度は私が眉根を寄せる番でした。私は実際、何も知りません。だって妻は、部屋に患者以外誰も入れなかったのだから。

しばらく考え込んだ末、唯一、思い当たる事が浮かびました。それ以外は何も思い浮かびませんでした。

「一緒にいて、見てくれないですか？ 正しいかどうか、不安なんです」

私がそうお願いをすると、老女は驚いたように目を見開きました。そしてまたすぐ、不機嫌そうな表情に戻りました。

「あたしが見たって。何も分からないし、正しいかなんて知らないよ」

「それでもいいです」

そう答えると、彼女は溜息とも舌打ちともつかないものを口から出しました。そして黙って、部屋の扉を開けました。

若い男性患者は、先ほどと同じように、静かに眠っていました。

私は彼の傍らに立ち、見下ろしました。まだ20歳前後に見えます。大変、顔色が悪い。ここが何科の病棟かは知らないが外科では無いらしい、と何となく思いました。

そして部屋に漂う妻の香り。彼女の気配を感じようと、私は必死でした。

だけどね、美代子。私は、お前のやり方を知らないんだよ。

お前の歌しか、知らないんだ。

私は前屈みになり、彼に顔を近づけました。そして、そっと歌を歌いました。

それは妻がよく、口ずさんでいた歌でした。

彼女が庭の手入れをしている時に、二人で歩いている時に、夜、二人でじゃれあいながら寝ている時に。

そんな時によく彼女が歌う歌で、歌っている時の彼女はどこか恍惚としていました。そして歌い終わると必ず、私を見て悪戯っぽい表情をします。「あなたの前でしか歌えないわ。だって恥ずかしいですもの」彼女はそう言いました。

途中で、私は感極まって涙が零れ落ちました。

歌い終わり、私は黙って頬の涙を拭きました。あまりに無防備になった自分が恥ずかしくて、老女を招き入れた事を大変後悔しました。自分が頼みこんで部屋に入れたくせに、です。

しかし彼女はそんな私に頓着せず、言いました。

「さあ、出よう」

そう言つとサッサと部屋を出て行きます。私は慌てて後を追おうとしました。咄嗟に患者を振り返ると、彼の顔色は良くなっているようでした。

「あれで良かったんだろうか？」

彼女を追いかけながら尋ねると、老女は答えました。

「さあね。あたしに聞かないでくれ。あたしはあんたみたいに来る訳じゃない」

「でもあなたは、私に『自分の仕事をしろ』と言ったではありませんか？」

すると老女は立ち止り、私を見上げて言いました。

「それぐらいは分かるよ。でも、それだけだ。あたしは昔から、人よりちょっと勤がいいだけなんだ。余計な期待はしないでくれ」

「でも私は何も分からない」

「知らないよ、そんな事は。分からない割にはやってたじゃないか。あたしはあんたの助けにはならないよ。あーあ、こんな事なら手を出さずじゃなかった」

老女は忌々しそうに言いました。

「あたしはお人よしなんだ。そのせいで、いつも割にあわない事ばかりが身に起こる。人がよくって、損をするんだよ」

到底人がいい様にも見えず、決して損ばかりして来た様にも見えない老女の顔つきを眺めながら、私は最後の質問をしました。

「私には、本当に何も見えない。あなたには見えるのか？ 私の妻は死んでしまった。とても美しいんだ。元々は、彼女の能力ちからなんだ」

すると彼女は、探る様な目つきで、私をジッと見つめました。

「あたしが、その女房を見たらどうなんだい？ そうしたら女房は居て、あたしが見なかったら、女房はあなたの傍にはいないってことかい？」

「……」

「見えるモノは居て、見えないモノは居ない。そう思うならそれでいいじゃないか。あんたに見えないなら、あんたにとっては居ないんだよ」

「私はそんな禅問答がしたいんじゃない。妻の霊が、私の傍にいるのかどうかを知りたいんだ」

「見えない」

老女は言い切りました。

「見えない。元々あたしには、滅多に見えない。でもそれは誰にとっても、何の答にもなりはしない。あんたがするべきことはただ一つ。自分の仕事をおやり。自分にできる事を、最大限のおやり」

そして彼女は初めて、その日に焼けて黒ずんだ、カサカサの肌の

顔を歪ませて、笑ったのです。

「あんたの女房も、そうだったんだろ？ 自分に出来る事を、一杯やった。違うかい？」

私は、二人で交わしたあの会話を思い出し、一瞬息が詰まりました。

これが初めて、私が人を癒した人の事です。私は妻の様に、患者の体を治したのです。一瞬で、触れる事も無く治したのです。

歌を歌う事によって。

#### 4 (後書き)

やっと、不思議世界に辿りつきました。

ここまで読んで下さった方は、「サイな……」の、どのキャラクターに関わるお話か分かると思います。最後に出しますので、お楽しみに？

でも、前作をお読みで無い方でも楽しめる様に、独立した中編にしています。あと数話、お付き合いください。ありがとうございます。

その一件以来、道を歩く度に花の香りを嗅いだり縁取られた人間が見えるのか、と私は内心怯えました。しかし、そういう事は全く起きませんでした。そもそもその様な特殊な患者が少ないのか、或いは私の…多分妻から受け継いだ…特殊能力が大した力を持っていないのか、のどちらかだと思います。

次の患者に出会ったのは、約一年後でした。

やはり、同じ病院内で、です。私は、風邪を引いた父の付き添いで来ていました。

花の香りが漂ってきて、私は自分が呼ばれている事に気付きました。

父に、しばらく席を外す事を伝えると、私はその香りを辿って行きました。

前回と違い、その患者は大部屋に横たわっていました。しかし大部屋と言っても、患者は彼ともう一人だけ、あとは空きベッドでした。

彼は年の頃50代くらい、傍らに奥さんらしきご婦人が付き添っていました。綺麗な着物を着て、とても上品そうな女性でした。

彼女の存在に、私は戸惑いました。事情を知らない一般人にどのような説明をすればいいのか、見当もつかなかったのです。しかし

目の前の男性は、たしかに、縁取られている。私が救うべき、病人だ。

私達は目が合い、私は軽く会釈をしました。

「……主人の、お知り合いですか？」

「……ええ、まあ」

この時点で、私は明らかに嘘をつきました。

「市役所の方ですか？」

私の様子に多少不信感を持ったであろう夫人が、警戒心を持って尋ねてきました。何故ここで市役所が出てくるのか、私にはさっぱり解りませんでした。今思えば、彼の勤め先だったのかもしれないん。

私は、ぎこちない笑みを浮かべながら尋ねました。

「ご主人の、具合の方はいかがですか？」

「……よくありません。免疫不全の合併症を起こしている、とお医者様から説明を受けましたが……何がどうなっているのやら……」

溜息をつきながらご婦人は答えました。不審人物であるはずの私に事情を打ち明けるとは、この人は実は見た目以上に疲れきっているのかもしれない、と思いました。

私は思い切って、申し出ました。

「しばらくの間、席をはずして頂けないでしょうか？」

「……何故ですか？」

彼女の目が見開かれ、眉が吊り上がり、私達の間一気に緊張感が走りました。

私はゴクつと生唾を飲み込みました。戦場で生死を分ける様な戦いを経験した私でも、こういった分野は全くの未経験でした。全く、先が読めない。

「……ご主人と、お話をしたいと思ひまして」

「主人は話の出来る状態ではありません」

彼女は即答しました。その身体は、得体のしれないモノは自分の主人に近づけない、という無言の強い気迫で溢れていました。

「あなたはお医者様なのですか？」

「残念ながら、違います。けれどもこちらの方を救う事は出来ます」

「失礼ですが、何をおっしゃっているのかさっぱり分かりません」

「ほんの5分でいいんです。席をはずしてただけませんか？」

「すみません、それは出来ません。存じ上げない方と病人の主人を、二人きりにする事は出来ません」

キツパリと言い放つ彼女は毅然としており、つい一分前に、私に溜息混じりの弱音を吐いた女性とは思えませんでした。

「……おっしやる通りです。申し訳ありませんでした」

今度は私が溜息をつく番でした。

覚悟を決めた私は、睨みつけるご婦人になるべく視線を向けられない様にして、ベッドの上の男性に近づきました。

私は、自分の出来る事を最大限、精一杯やる。それが、妻との約束なのです。交わした事の無い、しかし破る事の出来ない約束なのです。何故なら妻は、自分の命を投げうって、私の命を救ってくれたのですから。私は絶対、あの戦場では死にたくなかった。死ぬならこの日本で、死にたい。妻はその願いをかなえてくれたのです。裏切れることは、出来ない。

私は病人の耳元に口を寄せると、歌を歌い始めました。例の、私が唯一知っている妻の歌です。

この緊張下において前回の様に力を発揮する事が出来るのか、この歌に想いを込める事が出来るのか、私は不安でした。しかし、その不安は杞憂でした。

歌い始めて10秒も絶たずに、奥さんが凄い剣幕で止めに入ったからです。

「変な事をしないで下さい！ 何をなさっているんですか？」

「済みません、邪魔しないでください」

「なんですの、あなたは！ やめて下さい！ 主人におかしな事をしないで！」

「確かに変ですし、おかしいです。でも私は、ご主人を救おうと……」

「誰か！ 誰か来て！！ 誰か！」

今までの落ち着いた雰囲気から一変、彼女はヒステリックに大声で叫びました。

私は一瞬呆然としましたが、すぐに我にかえり、慌てて部屋を飛び出しました。やはり彼女は精神的に、相当追い詰められていたらしい。

妻の、「患者の家族は必ずしも協力的とは限らない」の台詞を思い出しました。

相変わらず、花の香りは漂っている。それを嗅ぎながら病室に背を向け、小走りに逃げていく自分が、まるで妻に背を向けて裏切っている様な気分でした。私はとてつもない無力感に包まれました。自分がどうしようもなく、奇妙で得体のしれない人間になってしまった様な気さえ、しました。

次の患者に出会ったのは、それから更に一年後でした。

私は仕事で外回りをしておりました。ビルの電気配線のアフターチェックです。そして、小児専門病院に向かいました。そこで、あの花の香りを嗅いだのです。

その瞬間、私はひどく緊張しました。小児病院であると言っ事は、

保護者の付き添いがある場合が多い。そうなるつまり、前回の様に激しい拒絶と門前払いを受ける可能性が高い、と言う事です。しかも救うべき患者は、子供。病院内を混乱に陥れる結果になっても、前回の様に簡単に引き下がるわけには、いかないだろう。

しかしそうになると、私は職を失うのではないだろうか？ だとすると、出なおすべきなのは？

そう思いつつ香りを辿っていくと、入院病棟の廊下に、一人の男の子が立っていました。5、6歳と言った所でしょうか。寝間着姿の深い眼差しの子供で、何もかも見据えた様なその瞳は、何故か妻を彷彿とさせました。全体的にやせぎすで、青白い顔色をしていました。

そして彼は縁取られ、鮮やかに浮かび上がっております。彼の周りで、妻の香りが充満している。

私達は廊下で、しばし無言で対峙しました。

「おじさん、だあれ？」

男の子はぬいぐるみを片手に、静かに聞いてきました。私は穏やかに答えました。

「君の病気を治しに来たんだ」

「……ふうん……」

「ちょっとの間、おじさんの下手な歌を聞いてくれるかい？」  
「いいよ」

その子は、とても落ち着いていました。彼を見ていたら、途中で親が来たらどうしよう、といった不安は消えていました。

私はその場にしゃがみ、微笑みながら彼を引き寄せました。男の子は、ちっとも恐がりませんでした。

私は彼の耳元で、あの歌を、歌いました。胸の中は愛しさで溢れ、恥ずかしさや戸惑いは、全く起きませんでした。

歌い終わり一息つき、私は彼の顔を見ました。彼の顔色は明らかに良く、頬に赤みが差し、目の輝きも違って見えました。

彼は私を見て、言いました。

「ありがとう」

「こちらこそ、ありがとう」

自然と私の口からお礼の言葉がついて出ました。私達はどちらかともなく微笑み会いました。

もうこの子は大丈夫、そう確信しました。私は、成功した。

再び、やってのけた。

その時です。

「……おじさん、だあれ？」

男の子の数メートル背後から、子供の声がかかりました。

二人して振り向くと、そこには少し年上の……8、9歳くらいの女の子が、やはり寝間着姿で立っていました。

人に見られた緊張感で体を強張らせていた私は、相手が子供である事を知って、内心ホッとしました。

しかし、それが悪かった。

病人らしく顔色の悪い彼女は、少し驚いたように目を見開いて私を見つめました。

「後ろが光ってるよ？……わかった！ おじさん、神様なんですよ！」

後ろが光ってる？

私は絶句して、慌てて自分の後ろを見ました。もちろん、何も光ってはいません。

再び彼女に視線を戻しましたが、女の子は期待に満ちた瞳で私を見上げていました。私は大変戸惑いました。

小さな子供が不思議な力を持っている、という話は、時々聞く。長い闘病生活を送っている人間が不思議な物を見る、という話も、たまに聞く。

でも一番の問題なのは、この女の子の周りは、何も縁取りがされていない、という事なのです。

縁取りもされておらず、花の香りも、全く、しないのです。しないどころか、私達の空間からはすっかり消えてしまっていた。まるでお役御免と言った様に、です。

私は彼女の顔を見ながら、焦ってきました。

そんな私の焦りを知っている様に、彼女は言葉を積みかけました。

「神様で、わたしの病気を治しに来てくれたんでしょう？」

「……」

「わたしにもやって！ あの子にやっただみたいに、お歌を歌って、わたしを治して！」

やっと掴んだ希望の光。そう言っている様に、全開の笑顔の奥には縋りつく様な色があります。

私は断ることなど、出来ませんでした。

例えば気休めでも、それがこの子の病気のプラスになる、と信じられたのです。

「……いいよ、やってあげる」

私は彼女に近づくと、かまひ 跪き、あの歌を歌いました。しかしその歌は、自分でも戸惑う程、せいさい 精彩さに欠ける歌でした。あの感覚を取り

戻そうとしても、全然上手くいきませんでした。

「違う！」

女の子が、私の歌を遮る様に叫びました。

「そんなお歌じゃない！ さっきと全然違う！ さっきと同じお歌を歌って！ あの子にやったのと同じ事をして！」

「同じお歌だよ」

「違う違う！！」

「本当だよ」

「違う違う！！」

彼女は前屈みになり、体全体で主張しました。この不思議な女の子は、何もかも見通す事が出来るのに、私の患者では無いのです。

私は妻を思い浮かべました。何故だ、美代子。どうしてこの子では、ダメなんだ。何故、治せる病人と治せない病人がいるんだ。どうして目の前のこの子を、救えないんだ。

こんな時、私はどうすればいいんだ？

頼むから、戻ってきておくれ。

花の香りは、してきませんでした。妻の気配も、感じる事は出来

ませんでした。

あの優しい彼女が、こうやって人を選別するとは思えない。これには多分、妻もコントロールできない何かの力が働いているんだ。そう思わないと、やっていられませんでした。

「……ごめんね。……出来ないんだ」

声を絞り出して言うと、女の子は私の肩を激しく叩きました。

「嘘つき!! 出来るって言ったのに! 嘘つき!!」

目の前の男の子は、辛そうに俯いています。しかしこの場から去る気配がありません。

ひよっとしたらこの子達は、この病棟で仲が良かったのかもしれない。この女の子は、この男の子の姉の様に面倒を見てきたのかもしれない。

そして私は今、そんな二人の仲を裂いてしまったのかもしれない。

「治してよー。お家に帰りたいよー」

女の子は泣きながら、私の肩を叩き続けました。

「おじさんは無理でも、必ず、お医者さまが治して下さいよ..」

「嘘だ！ だつてずーっとずーっとここにいるもん！ ちっとも治らないもん！」

「少しずつ治っているから、ここにいるんだよ」

全く気の利いた事を言えない私の肩を、彼女はずっと叩き続けました。

その様子は、やはり全てを悟って見通しているかのようでした。分かっていてからこそ、誰かに悲しみをぶつけずにはいられない。幼い筈の女の子が、とても大人の女性に感じました。

私はずっと、その場に座り続けました。

助ける事の出来ない病人まで、何故引き受けるか。

あの時妻は、なんて言ったのだろう？

小児病棟から逃げるように去って以来、私は戦々恐々としていました。あの少女の顔が脳裏から離れず、また同じような状況に陥ってしまったらどうしよう、と怯えていました。

そんな私の胸中が伝わったのか、妻の香りは再び、すっかりなりを潜めてしまいました。

有り難くも私の子供達はスクスクと大きくなり、私は妻の面影を胸に、家族と接する事にも馴れていきました。

息子は私に似ていますが、目は妻に似ていました。娘は、顔の輪郭は妻に似ていましたが、それ以外は私に似ていました。

子供達に妻と同じ能力が受け継がれていた場合、どのような道を示してやるべきか。

それが私の課題となっていきました。幸いな事に、その兆候は現れていませんでした。

二年がたち、父が亡くなりました。

会社の外回りで、道を歩いていた時のことです。

私は、事故現場に遭遇しました。車道に人が倒れ自動車が傍らに止まって、運転手らしき人が不安げに立ちつくしています。複数の人達が慌ただしく動いていましたが、救急車も警察もまだ来ていませんでした。

見るともなしにその光景を目の端に捕らえ、その場を通り過ぎようとした時に、私はあの花の香りを嗅ぎました。信じられなかった。何故なら今までは病人からしかその香りは漂って来ず、あの歌は病人の内臓か何かを治す呪文の歌だ、と信じ込んでいたからです。

まさかと思いなから事故現場を振り返り、恐る恐る彼らを覗いてみると、明らかに、道端に倒れている男性が鮮やかに浮き上がり縁取られていた。

そして彼の周りには黒山の人ばかり。

私は大変戸惑いました。怪我人を治した事も無ければ、こんな大勢の人達の前で行う勇氣もなかったのです。しかし、妻が呼んでいる。花の香りで私を呼んでいる。だから私は、やるしか、ない。

私は人山をかき分け、彼の元に行きました。

30代前半に見える彼は、割としっかりとしているように見えましたが、しかし怪我の状態とは、事故直後の表情では測れないことを、私は戦地で学んでいます。腕と足に大きな傷があつて血が流れてましたが、頭には擦り傷しか見えませんでした。

彼と私は目が合いました。

すると驚く事に彼は目を見開いて私を凝視し、その後、私に向かって手を伸ばしてきました。その手は思った以上に傷だらけでした。思わず彼の手を取ると、彼は私の目を覗き込みました。そして周りに向かい、

「すこし、外して下さい」

と頼んだのです。私は度肝を抜かれました。

人だかりは、不思議そうにしながらも我々に空間を開けました。彼は私に囁きました。

「あなた、サイか？」

「…何だつて？」

「何でもいい。俺に用があるんだろう？ 何だ？」

「…君を、助けられると思う」

私がそう言うと、彼は再び目を見開きました。

「……そういう人間もいるとは聞いた事があるが……」

そう言って、彼は口をきつく結びました。目が、「やっつけてくれ」と言っています。

私は周囲の目がまだ気になりましたが、もうこれ以上時間がない事も、逃げられない事も悟りました。

私は息を深く吸うと、あの歌を歌いました。

周囲が奇異の目で私達を見ています。しかし誰も止めません。彼が私の手を握り続けているせいもあるのでしょう。私が、どこかの新興宗教の伝道師か何かだと思われるのかも知れません。私は構わず歌い続けました。

歌い終わりました。彼の顔を見ました。私には違いがよく分かりません。ただ、彼は力強く頷きました。手足の傷が塞がっている様には見えませんでした。流血は、止まっています。

彼は起き上がり、握っている私の手を引き寄せると、私の耳元で囁きました。

「それで、あなたはサイなのか？」

私は顔を離して、彼を見つめました。若い彼の顔は年の割にはどこかあどけなく、大きな瞳が印象的でした。

「本当に私は分からないんだ。サイって何だ？」

「神通力の事だよ。人の体を治す神通力があるかどうかは知らないが。あなたの力は、他にどんなものがあるんだ？」

「私の力ではない。それに、他の事など何も出来ない」

「あなたの力じゃないって？ それはどう言う事だ？」

「それよりも教えてくれ。サイって何だ？ 他にも、こつという連中がいるのか？」

私は彼に詰め寄りました。私の頭の中は、妻と子供達の事でいっぱいでした。妻は孤独だった。私は結局、彼女にとって何の力にもなれなかった。もし子供達にこの能力が受け継がれた時、私は同じ過ちを犯したくない。彼らに、親としての指針を示してやりたい。

彼はじっと、私を見つめました。

「一般人にはない、余計な能力を持った人間の事を言うんだ。英語だよ。子供に比較的多いんだが、ハタチを過ぎれば無くなる場合が多い。俺もそうだった。あんたみたいに大人になっても持ち続けるのは、珍しいんだ」

子供に多い、と聞いて私の体に緊張が走りました。自分の子供達の顔が浮かびました。彼らは十代です。

「子供に多いって、その能力はいつ現れるんだ？」

「人それぞれだが、大抵思春期までに現れる」

マズイ。子供達は、まさしく思春期真っただ中だ。

私が唇を噛み締めると、彼は言いました。

「あんたみたいな能力がある人間の話を、昔、聞いた事がある」

私は驚いて彼を見ました。誰の事を言っているんだ？ 彼は、妻の事を知っているのだろうか？

「普段は、吸魂された人間を癒すんだらう？」

「キュウ……何だって？」

耳慣れない台詞に、私は眉根を寄せました。

「吸魂された人間は、免疫不全を起こす。一種のアレルギー反応だ。多分生気を吸い取られる時に、記憶や痛みを麻痺させる何かを流しこまれるのだろう。それが体の内部に入り、拒否反応を起こす」

「……君は、何を言っているんだ？」

「俺はこれでも医者なんだよ。この歳でまだ勉強中の、医学部生だけだね」

彼は苦笑して、私を見ました。私は彼の顔を見つめ、そして考えました。そうか。私が今まで癒してきた病人は、その「キュウコンされた」人達だったのか。なにか特殊な事情があつての病気だった訳だ。

そして改めて、目の前の彼を観察しました。この青年は、素直な瞳をしている。育ちも良さそうで、多分、信頼出来る男だ。

だから妻は、私を彼の所に呼んだのかもしれない。  
彼は、これからの私達……子供達に、必要な人間なのかもしれない。

遠くで、救急車の音が聞こえてきました。  
彼は私を見上げて言いました。

「怪我をした人間も救えるなんて初めて聞いた。波長があう人間もたまに癒せる、とは聞いたから、俺があんたにとってその人間なのかな？ とはいえ、あんたみたいな年長者のサイも初めて見た。今日は不思議な事だらけだ」

「連絡先を教えてください」

私の申し出に、彼は少し驚いたようでした。

「それを貰っても、二度と会わないかもしれない。こちらの連絡先を君に教えるつもりもない。それでも構わなければ、連絡先を教えてくださいませんか？……君の助けが、将来必要になるかもしれないんだ」

救急車が目の前で止まりました。

私をジッと見つめていた彼は、やがて明るく微笑みました。

「命の恩人の頼みを、断る訳がないだろう？」

やがて救急隊員がやってきて、私達の間割り込みました。彼が私に右手を差し出したので、私は慌てて鞆からノートを取り出し彼に渡し、彼は自分の連絡先を書きこみました。その間に救急隊員は手際良く処置をして、そして彼を運んで行きました。

車に乗せられた彼に、私は最後の声をかけました。

「教えてくれ！ 君の言ったサイは……遠くにいる人間の、命も救えるのか？」

彼は僅かに目を見開きました。そして、切なそうに微笑みました。

「その答えは、あんたの中でもう、出てるんじゃないのか？」

救急車の扉が閉まり、彼は去って行きました。私はその車を、ただただ見送っておりました。

以上がね、私の身の上に起きた、妙なお話です。結局子供達に、妻の能力は出ませんでした。ですから本当に、コレで終わりです。ええ、これでしまいです。

何故かといいますとね、それ以来私は、例の花の香りを嗅いでいないのですわ。何ででしょうね？ 使い果たしてしまったのでしょうか。それとも、妻が成仏したのでしょうか？

それでも、あの香りを思い出す事は出来ます。それは、妻の笑顔を思い浮かべると同じくらい、簡単な事です。

この話、初めて人にしました。誰かに話そうと思った事は、一度

もありません。私に嫁ぐ前の妻は随分と差別され、苦勞をして、孤独でした。そんな彼女をこれ以上、死後とは言え、人目にさらしたくなかったのですよ。

でも流石にこの歳になりましたねえ。子供達もこの世を去り、私は浮世を離れて隠居の身です。見て下さい。この花は、本当に美しい。いや、日本は素晴らしい国ですね。四季があり、自然が豊かで、花と緑に溢れている。そりゃ昔よりは草木も少なくなっただしよすが、それでも随分と暮らしやすくなりましたよ。素晴らしい事じゃないですか。

ああ、聞いてくれて本当にありがとう。何だか少し肩の荷が下りた気がします。子供達には話さないと決めた時点で墓場まで持つて行くつもりでしたが、あなたのお顔を見ていたら、そんな頑固な気持ちも失せました。時代が変わった今、益々信じられない話として誰かのお耳に残す事も、まあ、悪くはありませんな。

こういふ夫婦がいた、と思ってくれば嬉しいです。こういふ、不器用な夫婦がいた、とね。

あ、そうそう、交通事故から救った彼は、その後無事にお医者様になりましたよ。私達はその後も、年賀状のやり取りだけはしとりました。と言つても私が先方に連絡先を教えたのは、それから更に7年後の事です。しかも今は彼も既に他界しております。ただ、生前の子供達には、彼の事を伝えました。

妻の事情と共に、お前たちの身の上に、文字通り何かが起こった  
ら、この人をまず頼りなさい、と。

今では家族同志、付き合いが続いとるようです。まあ私にはもう、  
関係の無い事ですが。

爽やかな空気と明るい陽光の中、狭い駐車場の木陰で、一人の男が車にもたれかかって立っていた。二十歳前後、身長も肩幅もあり脚も長く均整の取れた体つきで、つり目が印象的だ。黙って立っていると、威圧感がある。

こんな時、煙草でもふかしていたら時間潰しになるんだろうな、と彼はぼんやりと思った。彼は煙草を吸わない。こんな爽やかな日に大学のキャンパスで友人が煙草を吸っているのを見ると、正直、勿体無いと思う。もっと緑の空気を楽しめばいいのに、と思うのだが、友人に言わせると、空気がうまいと煙草を吸いたくなるそうだ。そんなものなのか、とも思う。

エンジンを切り、車のラジオをかけ、開けた窓から僅かに聞こえる音楽になんとなく耳を傾けていた。この老人ホームは住宅街の中にあり、緑も豊かで環境は抜群、出来ればこのゆつたりとした雰囲気壊したくはなかった。

人の気配がして顔を向けると、待ち人が現れた。こちらも非常にバランスの取れた体つきをしている。しかし長身とはいえ背は彼より低く、そして華奢だ。Tシャツの上に細身の麻のジャケットを重ね、腕まくりをし、パンツを合わせたそのスタイルは完璧だが、その人物が女性だとは、多分殆んどほとの人が気付かない。サラサラの長めの前髪が彼女の切れ長の目によく似合う、と彼はいつも思っている。

「どうだった？」

彼は明るく声をかけたが、彼女が見せた笑顔は少し曇っていた。

「ん？……なんかへビーだった」

「なんか訊けたか？」

「まあ、それなりに」

「参考になりそうか？」

「さあね。そういう事は、先になってみないと」

そう言つと軽く肩を竦め、彼女は彼の隣に並び、同じく車にもたれかかった。弱冠疲れた様子でホツと溜息をつき、青空を見上げる。しかし彼はお構いなしで、明るく続けた。

「でもとても、100歳過ぎてるよーには見えねーよな。若いよ」

「すっかりした話し振りでしたよ。記憶もハッキリしてるし。…

…似てるんだって、私が」

「何に？」

「彼の奥さんに」

彼は少し眼を見開き、彼女を見た。彼女はチラツと横目で彼を見ると、苦笑いをする。

それを見た彼は面白そうに、そして感心した様に言った。

「……へえー。遺伝子ってのはすげえな。似てんだ？ 気付いたの

か、ヒトミ」

「さあ、どうだろう？ 特に何も言われませんでしたけど」

「そっちなも何で名乗んねーんだよ？」

すると彼女は再び空を見上げ、気だるそうに答えた。

「似てるどころか。まるで生まれ変わりでしょう、特技受け継いじやっているんだから。死ぬほど愛した妻の再来に、あの人がどんな衝撃を受けるか……考えるだけで、重い。疲れる」

「珍しー。まいつてんな、ヒトミちゃん」

「まいつてなきや、わざわざこんな所まで足を運びません」

ツンとした表情で答える彼女を見て、彼は益々笑顔を見せた。

陽気に笑いながらバンバン、と大袈裟に彼女の肩を叩き、肘を絡めてグイと引き寄せ、横から顔を覗き込むようにして言った。

「よーしよし、俺が景気づけてやるう。奢りだ。カラオケ行こうぜ？」

「カラオケは嫌い。知ってるでしょう？」

「ウソだろ、おい。真琴もう、部屋で待ってるぜ？」

衝撃を受けた様な彼の表情。歌う気満々だったのが、よくわかる。

ヒトミはガックリと肩を落とし、口には出さずとも内心で舌打ちをした。

「……真琴め。はめたな……」

幼馴染である彼の妹の、してやったりの顔が目には浮かぶ。この兄あに妹はカラオケ好きなのだが、一緒に行ったら騒々しくて堪らない。特に兄貴の歌は、繊細な彼女の耳には正直耐えがたい。

ヒトミは下唇を僅かに突き出し、自分の肩を抱える彼を横目で睨にらんだ。

「素人の歌を聞くのは苦痛なの」

「……うっわー。なんてえタカビーな台詞……」

「兄妹きょうだいで楽しんできて下さい」

プイッと横を向くと彼の腕から抜け出て、助手席にまわりサツサと車に乗り込む。

一方の彼はまだドアの外で、真剣な表情で考えていた。

「……まあ、それもしようがないか……」

何がしょうがないんだか。カラオケに行きたくて堪らない上に最愛の妹が待っているとなれば、迷えないクセに。かっこつけちゃって。ヒトミは白い眼で彼を見た。

この兄貴の妹に対する溺愛うつつっぷりは、一時期、傍で見ても鬱陶とつしい程だった。そしてその度に、短気な兄妹だからすぐに大喧嘩けんかになっていた。

運転席に乗り込んだ彼は車を発進させながら、彼女に聞いてきた。

「ヒトミはどこ行くんだよ」

どこか最寄りで降ろしてくれるつもりらしい。

「久々にゲーセンでも行こうかなあ。のんびりと楽しむのもいいかも」

「女が一人、ゲーセンでのんびり、ってどうよ？」

「結構ナンパされるんだ、これが」

前方を見ながらヒトミがニヤツと笑うと、運転席の彼が黙り込んだ。  
だ。

しばらく彼女は気にしていなかったが、いつもはお喋りな彼が黙っている事の奇妙さにやっと気付き、右横を見た。彼のつり目が益々つり上がって、唇が突き出ている。

なんだ、これ。

「……………何？」

「俺も行く」

「何で？ カラオケは？」

「……………別にそんな歌いたって訳じゃないし。俺が行かなくなっちゃって、あいつも誰か誘うだろ。そもそも相手が俺じゃなくなっちゃって真琴もせいせいするだろうし、うん」

「……………」

「……………」

絶対、嘘だ。

「ナンパって言ったって、女に、ですよ？」

「あ、なんだそうなんだ」

真顔で即答。そしてふと気付いたように、やはり真顔で、ヒトミを眺めた。

「お前、女もいけるクチ？」

思わずの、絶句。一気にヒトミの目つきが、生ぬるくなる。

「…………カラオケ行けば？」

「お前としては人生、人の二倍楽しめんだらうけど、守備範囲が二倍に広がる身としては悩ましいよな」

「…………薫が行かないと、真琴、礼を呼ぶかもよ？」

バカらしくて付き合いきれず、ヒトミは爆弾を投げた。

爆弾を投げられた薫は、運転中なのにもかかわらず、思いつきり固まった。

「…………マジで？」

「個室で二人つきり。再会から日も浅い。盛り上がるだろうなあ」

妹とその彼氏が（しかも生意気で目つきも悪く、最強に気に喰わない奴が）個室でいちゃついている姿をくつきりはつきりと想像してしまつたらしく、薫は声にならない悲鳴を上げた。

「……………っ！」

「じつくりたつぷり気が済むまで、悩んで下さい」

ヒトミは満足気に深く助手席に沈むと、腕を組んで目を閉じた。彼の悩みはしばらく続くだろうし、続いている間はこのドライブも続くだろう。だって自分の目的地が分かっていないんだから。

クスツと笑う。守備範囲が二倍、って何よ？

騒々しい兄妹の間に割り込めた事が実はそれなりに嬉しく、彼に不器用な甘え方をしてしまっている自分が、それなりに笑える。そして妹と自分の間で揺れ動いている彼が、結構愛おしい。

いつの間にか、憂鬱な気分が僅かに薄らいでいた。

曾祖父母の時とは、時代も環境も状況も違う。何とかなるかもしれない。何とかならなくても、それが自分の運命なら、何とかするしかない。

ヒトミはふと、花の香りを嗅いだような気がして、目を開いた。しかし窓の外の景色は時速60キロで流れ続けている。そして隣には、相変わらず眉間に皺を寄せてぶつぶつと悩み続けている、馴染みの彼がいる。そして、花の香り。

あの老人は、本当は何もかも分かっていたのかもしれない。薫を眺めながら、ヒトミはぼんやりと思った。

自分が何者なのかも、何故彼を訪ねてきたのかも、曾祖父は分かっていたのかもしれない。

そしてひよつとしたら、彼は、今もどこかで。

こっさりあの歌を歌って、誰かの命を救っているのかもしれない。

幼い頃に、子守歌代わりに聞いたあの歌。

時には胸を焦がす程切なく、時には優しく包み込む様なあの歌。

母から母へと伝えられる、我が家に伝わるあの歌を。

## 7 (後書き)

完結です。最後はこのカップルに、雰囲気をもたせてもらいました。和みましたでしょうか？

ヒトミの曾お爺ちゃんが最後に救った交通事故のけが人は、宮地家、薫と真琴の曾お爺ちゃんだった、という裏設定です。それ以来、宮地家と東田家は繋がっているのですが裏すぎる設定ですね……。

でも、一話から六話で独立したお話として読めるように、試みたりもります。いかがでしたでしょうか？

お読みいただきありがとうございます。

このお話が、皆さまのお暇つぶしに役立ちましたように……。

戸理 葵

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6077u/>

---

秘密の花園

2011年7月13日02時35分発行